

## いじめ問題への取り組み —学校放送番組の視聴後の指導助言—

### An Effort to Tackle the Problems of Bullying —Advice After Watching a TV Program for School Education—

金 森 俊 朗\*

#### 要旨

NHKEテレビ「いじめノックアウト」は、「いじりが暴走するとき」「いじめたい気持ち、どうする?」「けんかといじめの違いって何?」「いじめの“目撃者”になったとき」などのいじめ問題に関わる番組を放映した。筆者はその制作の相談と現場教師が視聴後にどのように子どもに働きかけたらいいのかを求められて、具体的指導のあり方をNHKのHPに提起してきた。番組の考察とそれに基づく具体的指導をまとめてみた。

キーワード：話し合い(Talks in a class)／生きる物語(Story of daily life)／  
自己を掘る(Talking about oneself)

#### はじめに

滋賀・大津や東京・品川などでいじめ自殺事件が相次いで起こり、2012年9月の文科省調査で「学校として児童生徒の生命又は身体の安全が脅かされるような重大な事態に至る恐れがあると考える件数」は、278件となっており、「どこで自殺事件が起きてても不思議ではない高水準の危険事態が続いている」<sup>1</sup>。そうした事態に対処しようとNHKEテレビは「いじめノックアウト」番組の制作放映を2013年4月12日より開始した。「これまで学校放送番組でも、“いじめ”をテーマにした番組を数多く放送してきましたが、“いじめ”に特化した番組は、長い歴史の中でもこれが初めて」だと言う。「番組は、思春期前に『いじめを許さない』心を育てるために小学3～4年生を対象にしていますが、“いじめ”が顕在化する高学年～中学生にも役に立つ内容を目指す」としている。筆者は、この番組の専門委員であると共に、番組を視聴した全国の教師向けに視聴後の話し合

いの実践的指導についてコメントを執筆しNHKのHPに10回掲載されるという役割を果たした。

番組はAKB48の高橋みなみを出演させ、番組への注目度を高めた。番組では、彼女に次々と難問が投げかけられる。彼女には脚本がなく、ぶっつけ本番に自分なりの答えを一生懸命考える生番組の手法を取っている。厳しい役をそれなりに果たしているのは、AKB48の総監督としてのリーダー力であろう。不十分なコメントであっても彼女に任せたのは、この番組は視聴後に子どもたちと教師が話し合うことを強く求めているからであろう。「話し合いのなかで、自分と違う意見や考えを認めたり、“いじめをなくす”には力をあわせる必要があること学んでくれること」、「『いじめゼロ』のクラスは、“話し合い”から生まれる」<sup>2</sup>との番組制作者の考えには強く同意できる。

恐らくこの番組を子どもに視聴させ、いじめ問題に取り組もうとしているのは、困難に直面し的確に指導できないでいる教師か経験の浅い教師である可能性が高いので、4月から9月までの番組10回に対する指導コメントは、分かりやすさと指導の具体的手順を求められた。当初より研究紀

\* KANAMORI, Toshiro  
北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科  
社会科・生活科

要に、番組のあらすじも明示し、いじめを乗り越える諸問題への具体的指導をさらに充実させまとめるつもりであったが、紙数制約のため逆に大幅に削除縮小を余儀なくされた。<sup>3</sup>

## 1 番組視聴後の教師への指導助言

### (1) 第1回「ガマンしちゃダメ！」に対する指導助言

#### ①感情を安心して表出させる

冒頭紹介の谷川俊太郎の詩「なくぞ」は、かつて3年生の国語教科書に掲載されていた。「なくぞ」は、詩を楽しむこと、泣くことの捉え直し、嫌なこととは何かを考えさせ、心に閉じ込めないで感情を表出することの大切さを教える作品である。筆者の学級でこの詩を学び合ったとき、子ども達は、「嫌なことをされたら誰だって、泣いていいんだよ」「嫌なことをされたら泣け、今すぐ泣け、泣いてストレスも宇宙もぶっとばせ!」「神様も味方して泣き出すのだから」と応援、励まされている詩だと受け止めた。感情を気楽に表出させることは、緊張、不安、ストレスを内面深くに閉じ込め蓄積させない。それは、いじめを起こさせないためにも、起きて訴えやすい環境を作るためにも重要である。(筆者の学級の実践例は紀要では大幅省略。以下単に「略」)

直接的に表現されたことだけが言葉ではない。表情やしぐさ、行動も子どもの言葉である。ましてや直接表現された話し言葉や書き言葉は、教師ならば豊かに聴き受け止めるべきである。しっかり聞いてくれる人にしか人間は大切なことを伝えない。話して/書いて良かったという実感を子どもに育てたとき、番組の拓のように「とても悲しく嫌だったこと」を書き出す。拓の学級は、作文や詩で自分の願いや困ったこと、喜びなどを書き表し、発表交流することを大切にしてきたのだ。

#### ②生きた自分の言葉の力

拓は葛藤の末、勇気を出して作文に書いた。「いじめられたらすぐに言うのですよ」という言葉だけの指導は、特にいじめられた子に対して何の力にもならない。すぐに抵抗、抗議、反撃できる子はいじめられない。学級スタートから、泣く、悲しむという感情を豊かに表出していいんだ

よ、つぶやきでもいいんだよ、先生は全力で受け止めるからとの具体的な取り組みがある安心感のもてるクラスづくりが必要である。

拓は作文を書いて先生の後押しを受けて(これが大切)学級に発表した。大切なのは、悲しむ当事者の身体、生きる物語(生活史)から生み出された、リアルな生きた言葉である。だからそうした言葉は、他者の心を深く揺さぶる。6年生当時を振り返った中学生である拓の友人達が「私は気づいていなかった。私はいじめでなく遊んでるって感じだった」「心に秘めていたことがよく伝わってきた」と述べている。高橋も述べているように、いじめ側は本当に何気なく相手を傷つけ、人間らしく生きること、学級に存在すること、学ぶことを抑圧している。だから、他者の生の、リアルな心に触れることがとても大切になる。手がカサカサだということ自体に拓は自己否定感をもっていたはずである。それを他者から軽蔑的に言われることは耐え難い苦痛である。学級の子どもたちは拓の心からの声で初めて気づいた。

以上述べてきたように映像を表面的に観ない。拓が書くまでの指導、拓の書きあげるまでの葛藤、発表していたときの教師の表情・まなざしや立つ位置、その後の指導などを想像豊かに追求して、学級の話し合いを深めるべきだ。その際、番組では「クラスはその後変わったか」という話題を提起しているが、筆者は「拓がそうした悲しく辛いことをどうして書き表し、発表できたのか」「拓のような悲しく辛いことは誰にでもあるのか、特別な子だけか」を話題にすべきだと考える。どこかで、教師自身の悲しく辛かった少年時代の物語をしっかりと語ることに必要である。

### (2) 第2回「あだ名は禁止するべきですか？」に対する指導助言

#### ①番組の中から大切に学びたいこと

あだ名はいじめにつながるので禁止すべきだというのはアンナの考えである。きっと、アンナが友人がひどいいじめを受け、それがあだ名と深くかかわっていたと推測できる。こんな場合、まず、禁止が妙案かどうかよりも、具体的な場面を想像できるかどうか問われる。筆者がすぐに想起した「足ロボット」事件は後述する。(略) 番

組で高橋は、あだ名の一律禁止は「何か違うものも減ってしまう気がする」と言い、アンナを説得するルールを戸惑いつつ慎重に考える。「何か違うもの」というのは、集団生活を送る構成員が、次第に関係性を深め、自然にその人らしい愛称＝あだ名で呼び合うことによって、さらに気軽に楽しく接するような親しみ、おおらかさなどであろう。

高橋が考えているのは、ルールというより、あだ名をつける側が大切にしなければという確認・合意事項だと考えるべきだ。番組で重要なのは、以下のことになる。

●自分の気持ちや生活を綴る「かがやきノート」という仲間と教師に伝える手段（方法・道具）とルートが準備されていること。

●それを生かして、あだ名が嫌だったケンタが「かがやきノート」に自らの気持ちを正直に書き、先生に訴えた（発信した）こと。

●それを担任教師が見過ごさずに重要事項として取り上げ、注意や怒りであだ名を止めないで、また、個別に呼んで説得しないで、全員に悲しみの声を受けとめさせ、話し合いをしていること。

●だからケンタは、また嫌になったらみんなに言って考えて貰うと言っていること、仲間も「嫌なこと、悲しいことを先生は無視せず、受け止めてくれる」と安心したこと。

その全ての過程を最大限に受け止めないで「ルール」を作ることだけは、絶対にしてはならない。なぜなら、最近、すぐに表面的な秩序の維持を先行させ、規則・ルール化とその徹底が強調されているからである。単純にルールを作ると、どうしても「破った、しっかり守れ！」という管理強化が問題になる。筆者は、あだ名に限らず、結果的に教師が主導する（子どもが教師の意図を読み取ったの作成も含む）ルール作りは極めて慎重であって欲しい、できれば避けて欲しいと願う。

## ②教師が押さえておきたいこと

あだ名とは何か？広辞苑を見ると「その人の特徴などによって実名のほかにつけた名。あざけりの意味や愛称としてつける」となっている。あだ名には、あざけり、非難して笑う側面と親しみを込めて呼ぶ愛称という側面の相反する二種が含まれている。現実には、この二種が様々な局面で

プラスマイナスのどちらかを色濃く表すことも多く、単純に一般化して議論できない微妙な問題が以下のようにあることを教師は深く理解しておく必要がある。

A 明らかに人権を侵害するようなあだ名は決して許されない。日本国憲法第14条の人種、信条、性別、社会的身分又は門地による差別はむろん、学力、運動能力、身体、趣味、服装、容姿、家族関係などによる差別、疎外、虐待、傷つける意味で使われるあだ名。それに近い「レッテル貼り」的なあだ名もある。

B A項にも該当するようなあだ名（例えば「デブ」）で本人も普段自虐的ではなく堂々と使っているけれど、また明らかに愛称だけれど、使う場面やそう呼ぶ人や集団によって差別、疎外、虐待、傷つけるニュアンスが強まる場合もかなりあり得る。また、当初自他共に愛称の意味でつけたあだ名に特定の人達が別の意味を密かに込めて使用している場合もある。

## ③息苦しさをつくる指導の固さ

いじめを起こさないことを意識し、一、二回目の番組コメントを読んで、きまじめ一辺倒になるべきではない。教師の意図を子ども達は鋭く見抜き、その期待に応えようとする。3年生までの発達段階は特に期待に過剰に応えようとする時期である。「嫌なことを家庭に持って帰るな。学校での嫌なことは学校ではき出して帰ろう」と呼びかけると、「終わりの会」では、「〇〇さんが、こんなことをしました。言いました。止めて下さい」という些細なことまでたくさん出る。筆者は、一定期間それも有り、と認めるが、やがて兄弟や父母での比較的乱暴な言葉の応酬を取り上げ話し合う。

少年時代は、互いが激しくぶつかり合い、言い争い、謝罪、和解、妥協などを学ぶことが大切になる。仮面をかぶった「良い子」であっては困る。それではいじめがかえって潜行していく心配も生まれる。そうした学習として、重松清・作『とんび』や椋鳩十編『いたずらわんぱくものがたり』などを読むことを薦めたい。

## (3) 第3回番組「いじりが暴走するとき」に対する指導助言

①軽すぎるノリ

大学生に『『いじり』っていじめでしょう？僕の少年、青年時代にはその言葉は友だち関係にはなかったよ』と話すと、Oは「先生、ちょっと違いますよ。いじりはほんの楽しみなんです」と答えた。するとYは「そんなことはない、あれはやっぱりいじめです。こいつはすぐに俺をいじるんだから」と反論。「お前だって結構楽しそうだよ」「お前にはそう見えてるだけだよ。俺は合わせて笑っているけど、しょっちゅう言われて頭にきているんだから」。それを聞いていたFが「まあまあ、仲良くやりましょう。ちょっとふざけて笑い合うくらい、いいやないですかあ」と言った調子でなだめ終わった。この場合、いじられるYは、いじるOにはっきり「嫌だ」「頭にきた」と言っているが、周りにいるFが「軽いノリ」で結局、事態を曖昧にしていじる側を支え、いじる・いじられる関係性を継続させている。この「軽さ」こそが大きな問題だと思う。

②強者・弱者の関係

絵本の中のようなすけ、自殺した真矢に共通している「いじられ」は、友だちという対等な関係ではなく、勉強ができる、運動能力が高い、腕力が強いという強者から、弱者が苦役や一定の役を演じ「続けさせられている」こと。それは、たまたまあった子ども特有のふざけ合いっこではない。弱者であるが故に集団内で一定の位置を得るために、外見上は「積極的に楽しんでいる」ように演じているのではないか？！との見方を番組終了後に、さらに自らの体験を掘り起こして話し合い、明らかにすることである。高橋は「いじられるということは、人に笑われるということ、どこか自分を殺さなければいけないこと」と的確にまとめているが、番組内の話し合いでは、それぞれの子どもが「言われるとなんで僕ばかりと暗い気持ちになる」「心がちくちく痛くなる」など、「自分の言葉」で多様に表現していることが大切である。話し合いの冒頭か途中に、教師自身が自分史を見つめ直して、「いじり・いじられ」体験をリアルに感情豊かに込めて語ることを忘れてはならない。

③エスカレート、暴走するわけは？

軽い気持ちで始めたいじめ、いじり、ふざけ合

いなどの多くは、する側が次第に慣れっこになり、あるいはされる側が最初「いじられキャラ」として級友の笑いを得たことが、人気者になったと喜ぶ、錯覚する矛盾から脱却できず、さらにする側がその「醜態」に自己の弱さを見いだしていつきをエスカレートしていく。そのことが番組の中で紹介された「パンツを下ろす」「振り向きざまに頬をたたく」「馬乗りになり、床に顔を押しつける」などになっていることを確認し、「なぜ、このように次第にひどくエスカレートするのか」を自分の体験を掘り起こしながら話し合いをする。

④誰かがSOSを発信している

高橋のいじられる側への「やっぱり言わなくては。言葉にしないと周りは分からない」「自分ができないことはやらない」、いじる側への「興を取るなら自分でやれ！」というやや強いメッセージをどう受けとめるか。当然のメッセージだが、むしろ「言葉にしないで、周りで気づいている人がいるはずだ。教師はその言葉無き、身体や生き様で表していることばを受け止めろ！」「本人も周りも言葉にできるような学級にしろ！」ではないか。

事実、この事件後の調査によって『『いじりが激しくて心配』とクラスの女子生徒が担任に訴えたこともあった』と判明している。また、「一方で、仲の良かった友人には『まじ痛い』と愚痴をこぼし、『いつかちゃんと注意しなきゃ』と話していた』ということである。さらに、命を絶つ一カ月前、いじる者の教科書をカッターナイフで切り裂くという事件を起こしていたが、担任が電話で親に弁償要求をして、彼のSOS、怒りの強さを見過ごしていた。(詳細は『大津中2いじめ自殺』共同通信大阪社会部、PHP新書の第三章を参照) このコメントは教師向けだからこそ、筆者は教師なら今日のいじめ問題について学習を深め、何らかのかたちで必ず発しているだろうSOSを読み取れるようにして欲しいと訴えたい。

番組後の話し合いでは、「やっぱり言わなくては！そうだよねえ。言ってほしいよね。どうしたらボク、私は言えるようになるのだろうか！」をぜひテーマにして頂きたい。

⑤死、つまり生きる意味

今回の番組は、制作スタッフ内の激しい議論上、真矢の自殺（自死）を取り上げた。筆者は「死」を取り上げることにあまり躊躇はしない。たとえば、国語教科書に掲載されている文学作品「スイミー」（二年）「ちーちゃんのかげおくり」（三年）「ごんぎつね」（四年）には、非常に重要な意味で「死」が描かれ、学習の対象になっている。子どもの日常には当然「死」との出会いがある。教師だけが「死」を特別視し、向き合うことを避けていると筆者には思える。

「真矢が生きていたら、そして私たちがこれから生きていけば、今現在とこれから、どんな楽しいこと、素敵なことがあるだろうか？私たち、父母、祖父母たち、全部をよ〜く見て考えてごらん」と投げかけ、考え、ノートに書き、発表し、黒板いっぱいになるまでとことんやる。生きるということは、それらを求めて、多くの人の支え、援助を受け、与えながら、自らと他者を輝かせて命を全うさせることなんだと深く理解することが大事になる。真矢は、それらを捨て、死を選んだのではない。追い詰められ、それらを実現する希望を絶たれ、絶望と死へと追い詰められていったのである。教師の生きること、追い詰められた死（例えば過労自殺死）への認識が問われている。

#### ⑥日常的に楽しみを、友の発見を

いじり（いじめ）、いじられて（いじめられて）楽しむというレベルの楽しみやストレス解消を、もっともっと高める必要がある。「学力向上」「規範意識（道徳）向上」が強調されてから、休み（自由遊び）時間や遠足・運動会・お楽しみ会等の【要求、自主自治、集団、討議、フスティバル、感動】の要素を強く持った教科外活動が減少した。「楽しさ」だけでなく、それぞれの個性を生かした活躍の場とそれぞれの新しい人間観がきらりと光って仲間に見えてくる機会が減った。各人が様々な場で「興を取る」なら「いじられキャラ」は必要ではなくなる。まず、教師がそうした場を、活動を、評価を積極的に作ること、生み出すことが問われている。

#### （４）第４回番組「いじめたい気持ち・・・どうする？」に対する指導助言

##### ①話し合うこと

テーマと番組内容を見て、「いじめたい気持ち」を、２段階に分けて考えることが必要だと考えた。これまでの番組の中でも指摘されているように、多くの場合、いじめる側にはいじめているという意識はなく、いじっている、からかっている、ふざけ合っている、楽しんでいるという状況である。それが最初の段階。次の段階は、最初からいじめるといふ目的意識がしっかりある場合もあるが、多くの場合、エスカレートするに従い、周囲にも加害者にもいじめではないのか？という自覚が生まれてくる。とするならば、まず、友をいじりたい、からかいふざけ合い、困らせたいという気持ちがどこから生まれてくるのか、生まれたときどうするか？を考える（話し合う）ことである。次に、いじめだと思いつつ、やめられないとき、あるいはもっといじめてやりたいという気持ちをどうするか？を考える（話し合う）ことである。

##### ②高校生の告白の意味を考える

そのことを念頭において番組に即して大事な点をみたい。まず注目すべきは、二人の高校生が番組に手紙を書き、さらに出演して、過去に友をいじめた経緯や現在の気持ちを語っていることだ。いじめていた自分をどうしてわざわざ進んで明らかにしたのかを教師は読み解き、子どもにその問いを投げかける必要がある。彼女たちは「その時は楽しかったが、何年か後に罪悪感が生まれ、今も残っていて辛い」、「嫌な思いが忘れられない」、だから「気づくチャンスを周りも教えて欲しい」と訴えたかったからである。いじめで苦しめた自分を許せず、今も苦しんでいることを、そして罪悪感は一生涯背負わなければならないことを分かって欲しかったからである。

筆者宛にも幼児を持つ母親から手紙が届いた。その母親は、小学生のときいじめられ、中学生になってからいじめる側になった。ようやく出産した我が子を見てみると、いじめられていた自分よりも、いじめていた醜い自分が思い出され、自分に嫌悪感が生まれ、母親であっていいのかと、また我が子もそうした醜さを表すのではないかと悩み苦しんでいると書いてあった。このコメントを読んだ教師や保護者にはそうした今も引きずっている体験が皆無でないはずである。そうしたことをさらけ出すことが、高橋が最後に「やっぱりや

っちゃダメ！」というブレーキになる。(※1)

③いじめたい気持ちは、なぜ？どこから？

次に注目すべき点は、二人の高校生が「いじめはストレス解消のはけ口になっていた」「ちょっかいかけて発散していた」という発言。なぜ、どういふストレスがあったのかは番組では触れていないので、可能な限りその点を話し合いで明らかにできたらいい。いじめたい気持、つまりイライラ、ストレス、葛藤、不安などから生まれる攻撃・暴力性は、多くの場合、勉強、スポーツ、習い事などの成績向上をひたすら求める競争とそこから格付けされる序列・選別の強まり、それぞれの人間の生き様やもの・ことの奥行き・価値が見えにくくなった社会や学習(教科書・授業)(※2)、その反面、ギャングエイジにふさわしいスリルや冒険に満ちた、多少の腕白、はみだしを許さない道徳主義や管理統制が強くなったことなどから生み出されている。家庭や健康などの問題も含めて、それぞれが抱えているイライラ、ストレス、葛藤などを彼女達の発言に注目しながら話し合いによって、どれだけ自由にリアルに具体的に語り出すことができるかが大切になる。なぜなら、他者にも分かるようにきちんと言語化できると、自分を見つめることができ、どろどろした心(内面世界)が整理できて、すっきりするから。イライラは、そうして言語化する努力をしないで、心に閉じ込めておけばおほほど暴発しやすくなる。その話し合いに引き続き、「そうしたイライラ、ストレスをそれぞれがどうやって発散、解消しているのか」まで話し合うことである。

④発散させるには？

筆者の学級では、「〇〇のばかやろう!!」と叫ぶ、作文や詩、日記に書いて仲間に発表し共感して貰うこと、エスケンやサッカーなど激しい遊び・スポーツに興ずる、歌を歌う、山野を駆け回ったり、木登りをするなどたくさん出された。友の多種多様な発散体験や方法を学ぶことには大きな意味がある。でも、そうした活動や文化は学級で一年間を通して意識的継続的に取り組んでいかなないと子どもの世界にはとても少なくなっている。大人は飲酒、釣り、カラオケ、スカイダイビング・・・などお金を出せば、ストレスを発散させる「フェスティバル文化」が多様にあるのに。

高橋が言う「もっと楽しいことっていっぱいあるよ」は、学級で話し合っって創り上げていかないと、一見あるようであり無いのが現実である。

(※1)「ゆるす、ゆるされる」人間関係を描いた作品として重松清の『かあちゃん』『カシオペアの丘で』『十字架』をお薦めしたい。最低一冊ならぜひ『かあちゃん』を。

(※2)かつて国語教科書に一本の鉛筆ができるまでの労働過程を描いた「一本の鉛筆の向こうに」(谷川俊太郎他、4年生、出典は“たくさんの不思議”『いっぽんの鉛筆のむこうに』福音館書店)や貴重な大自然・尾瀬を守るために命をかけた平野長靖を描いた「守る、みんなの尾瀬を」(6年生)などの教材は無くなってしまった。

⑤むかつきを発散させる具体的実践

筆者の具体的実践を紹介する。以下は拙著『いのちの教科書』(角川書店)の「むかつく子どもたち」の章からの引用である。(略)

## (5) 第5回番組「けんかといじめの違いって何？」に対する指導助言

①状況の本質を自分の頭で見抜く

二種の四日間の子どもの関係性を撮った写真を見て、普段の生活の中で起きている子ども相互のトラブル、ケンカ、いじめの状況を、自分の頭で考えていじめか否かを見極め判断すること、それをもとに話し合う大切さを訴えている。視聴者はそのことを通して、自分や仲間が同じようないじめ行為をしていないのかを問うことが主たる目的になっている。

なぜ、番組では迂遠と思えるような筋運びをしているのか。まず一つ目は、いじめ加害者の多くが「あれはいじめではなく、遊びだった、ふざけ合っって楽しんでた、いじりだった、軽いのりのケンカだった」という主張をしているからである。そうした「言い分」からではなく、表情を含めた関係性の実態をよく見つめて、自分で判断する力を育てたいからだと筆者は考えた。

二つ目は、自分自身が毎日身を置いている、どろどろとした現実(学級生活)は、突き放して客観的に見つめることが難しいので、典型的な写真を見せることによって、そうした状態が自分たち

の身辺におきていないのか、自分がやっていないのかを問うて欲しいからだと考えた。写真は、現実を問うための「鏡」である。

### ②大切なのは想像力

三つ目は、もしこうした状況の写真が四日間実際に撮られていたら、事態を放置した教員は大問題である。大切なのは、事態が推移した写真の四枚がなくても、一、二枚の段階で推移、すなわち前段階や今後起きるであろう場面（像）を想像する力を持って欲しいということだと考えた。いじめ問題が深刻化した学校では、具体的ないじめ行為に遭遇した教師が、その場面のみで安易にいじめでない判断し、前後の推移（経過と見通し）を予測、想像する力が弱かった。

そうした意味では、番組に登場した教師は、写真を次々に見せるのではなく、次に起こるであろう事態の像や子どもの表情、言動を子どもに想像させ、語らせてからにする方法を取ることが大切ではないか。暮らしや人間について、とりわけ悲しみの奥行きを豊かに想像する力が今、とても必要だ。喜怒哀楽が直接激しく交わされる人間関係、生活空間が狭く、薄くなり、想像力を育む原体験が乏しいからだ。

### ③視聴後に話し合うこと

番組は、一つ目、二つ目に焦点を当て、「写真を見ていじめについて考えた次の日、自分たちも同じことをしていないか」を考え、発表をしている様子が描かれている。見聞きしたことの発表が続く中、一人の女の子が遊び仲間の悪口を言っていたことを告白し、泣き続ける。ここが番組の中心場面だ。その後、「教室で、あっ、これはいじめかな、と互いに気をつけていたらいじめはなくなるだろう。どうしたらそんなクラスになるだろう」との問いかけで終わる。

視聴後の話し合いは、以下のようなテーマが考えられる。

- 1) 自ら「悪口をいった（いじめた）」と発表した女子を君たちはどう思うか。
- 2) あの学級では、あの女子に続いて何人もが「自分もやった」と言ったのかどうか。
- 3) いじめられたことがある、いじめている現場を見聞きしたと言う子は多いが、なぜあの女子のように自ら「やった」と言う子が少ないのか、自

分自身もなぜ言わないのか。

4) 「やってしまった」と正直に言えるようなクラスにするには、どうしたらいいのか。

5) いじめに限らず、とても言いにくくてずっと我慢していたが、ある日ついに正直に言ってみたら、と言う経験を語ってみよう。

どのようなテーマでの話し合いであっても、大切なのは、「こうしたらいいと思います」という傍観者的な話し合いに終始するのではなく、「私は、かつてこうした。しかし、今振り返ると、それはこうするべきだった。あの時の気持ちは、実は～だった。だから、みんなこうしようや」というようにぎりぎり「自分を語る」ことが必要である。そのためには、教師自身が、言い切ったあの女子のことを「自分のやったことに気づき、すなおに言うことは一番怖く勇気があることです」との高橋コメントを含んだ上で、さらに言い切ったことからあの女子が今後自分らしく生きる上で学び取ったこと、成長したこと、学級作る上での果たした役割などの大きさを噛んで含めるように語り込むことが大切になる。心拓いて、勇気を出して告白した子を孤立させるようなことだけは絶対にあってはならない。

### ④子どもの発達とケンカ

最後にケンカについて少し触れておく。ケンカはまず幼児段階から兄弟姉妹間で、保育幼稚園での遊び仲間ですきる。小学校2～4年生というギャングエイジと言われる時期、よくトラブル、ケンカが起きる。それらは、公平・平等・対等、正義、占有権等をめぐっての一時的で暴力的な自己主張の衝突である。その衝突を通して、妥協、謝罪、和解、関係の修復、自他の力、感情のコントロール、人間関係の距離感の取り方など、とても重要なことを学んでいく、発達上必要なものである。

## (6) 第6回番組「いじめの“目撃者”になったとき」に対する指導助言

### ①小さな希望

いじめの“目撃者”になったときは、いじめられたときについての難問である。大人の多くがいじめやトラブル、人権侵害の事態を「見て見ぬ振り」してかかわらない状況がある。しかし、大津市立O中学校のいじめ自殺事件でも、担任教師に

女生徒が目撃者として、否、同じ中学校に生きる生徒として心を痛めて伝えている。大きな事件にならないように小さな努力をしている子どもたちがたくさんいる。そこに希望がある。その希望を自分の学級、学校でも広げるために、今、できることを互いに模索、努力したい。

### ②行為の多様な具体例を子どもから学ぶ

番組では、〈誰か特定の人の机を運ばない〉、〈その人が使った水道を使わない〉、〈ある人を〇〇菌と言う〉という場面をほとんどの子が「見たことがある」と答えている。確かに、こうした事例は幼少期からある。番組は時間の制約上、その三点に絞っているが、学級で話し合うときには、「友だちの誰かを、〇〇菌とか、臭いとか、汚いとか、自分だけ良い子ぶってなどと言って、その子がよそつた給食を食べない、あるいは机を避けて通る、あるいは掃除のときにその人の机を運ばない、それ以外にもあるよね。どんなことがありますか？」とまず問うべきだ。そうすると、「その子の机を触って、ほら、おまえにもばい菌、うつしてやるって友だちを追いかけて遊んだ」、あるいはそんな光景を「見た」と次々に出るだろう。教師の知らない具体的な排除、いやがらせ行為が出てくるはずである。ここが子どもからまず学ぶべき点。教師の知らない理由をつけ、知らない場面、方法で展開されているはずである。子どもたちのいじめの手口を教師や親がよく知らないために見過ごしたという事例は数多く報告されている。

### ③「言おうとした」点に着目を

二番目に話し合うことは、それらの行為を「見た」「聞いた」「知った」とき、番組では「誰にも言えなかった訳は？」と問いかけて話し合っていた。これでは、「とても容易に言えない訳」のみが強く浮き彫りになり、その後の展望が見いだしにくくなる。高橋が苦しうに「嫌われる勇気を持つことも必要だ」と語り出したのはそのためだろう。「見て、聞いて知って、誰かに伝えたい、伝えなければならなかった」というように語っていない文脈を浮き彫りにすれば、人間的な想いが見えてくる。

まずは「～を見て、聞いて、知って、君はどん

な気持ちだったかな？ できればどうしたいと思ったのかな？」と柔らかく問うことが大事になる。なぜ、「柔らかさ」が大事になのか。番組では、ほぼ全員が、「見た」「聞いた」と答えている。同じ学年や学級なのに全員が「見物人」はおかしい。それらを「やった人」が必ずいる。彼等がそのときでなくても、近い内に言い出せるような雰囲気や大切にしておくことが大事になる。柔らかさが大切になるもう一つの理由は、多くの人に葛藤が生まれるからである。電車の中で高齢者に席を譲るかどうか、重い荷物を持って難儀しているのを見て声をかけるかどうかという全く知らない人にすら一歩踏み出すかどうか葛藤が生まれる。ましてこの場合は、同じ学級や学年である。

番組での「勇気がなかった」「やっているのが自分の友だちだった」「迷って言えなかった」「自分もいじめられるかも知れないから」との発言がヒントになる。そんな発言をしっかりと受け止めて以下のように語り、話し合ったらどうか。

『「勇気がなかった」ってことはまずは誰かに何かを言おうと思ったんだね。やっている本人？先生？それともお母さん？」「そう、先生なんだ。言えるならどんなふうに伝えようと思ってたのかな？」「そうなんだ、でもそういう心の中での言葉を直接言うのには、勇気があるものね。それで止めたんだ。止めてまたそんな様子を見ていてどんな気持ちだった？」「だよねえ、自分が直接やっていないのに、心がとっても痛んだり、苦しくなったり、暗くなったりするよねえ。だから、本当は言いたかった、言わなくてはい！と思った。そこがとっても大切だと私（先生）は思うんだ。私だって・・・と職員会議で発言したいけどちょっとの勇気が出せなくて迷ったままって言う場合がたくさんあるよ。大人だって毎日のように迷っているんだ。そんなふうにいじめの様子を見て、思ったこと、迷ったときの話を詳しく話して欲しいな。」と。

単語的な断片的な答えを次々に求めても、人間なら誰しもが当然持つ葛藤、つまり、ある場面でその人がその人なりに思った内面世界の物語が語られない。葛藤、迷いがかなり出され、共感が強く広がったとき、「そんな迷いを振り切って誰かに話したことがきっとあるはずだよ。語って欲し

いな」と促せば、あるいは書いてもらえば、必ず小さな一歩でも誰かに伝えた体験を思い起こすことがあるはず。3～4年生ならそれまでに種々のプラス経験もあるだろう。高橋が言っているように、「いじめられている子に大丈夫と寄り添ったり、あなたはどう思う、私といっしょに言ってみない」という経験が必ず出るはず。希望的結論は子どもたちの葛藤の現実の中に見いだせる。

#### ④話し合いの怖さと教師の姿勢

学級での話し合いの怖さは、初めに発言するのは発言力の強い子たちなので、彼らがその後の世論を形作る傾向があるということ。言葉足らずの子どもの想いを、あるいは葛藤の中に含まれる人間の良さを、教師が豊かに引き出すように、応答しながら進める努力が必要だ。人間の弱さ、苦しさに共感する、少しの話にもとことん耳を傾ける教師の姿が伝える勇気を後押しするから。その姿こそがこのテーマで最も重要になる。

実は小学校低、中学年ではかなり教師に、あるいは親・家族に、いじめ的な場面を目撃したり、いじめられたら伝えている。それが「伝えたら、告げ口した（チクッタ）と自分もいじめられる、仕返しされる」との不安、怯え、恐怖を持つのは、伝えられた教師や親が、即座に安易に、加害者に問いただしたり、叱ったり、罰を与えたりしたからである。伝えた人が加害者にすぐに分からないようにすることが指導の要だ。まずは事実かどうか、教師（たち）の目で鋭く状況を見つめ、調べて判断すること。筆者は伝えられたら多くの場合次のように問う。

「最近この学級で、おかしいなあとそれぞれが感じているがあるよね。また、何人かが表情に暗さを持っているようだよ。人間の心の内は、伝えて分かっただけで努力をしないと伝わらない。伝えなくて分かってくれ！って言われても難しいからね」というように十分語り込んでから書いてもらう。すると、いじめやいじめにつながることや私的な悩みなども書かれる。そのとき、直接伝えられた問題行動が誰からも書かれない場合もありえる。その場合は、あたかも多くの人が書いていたように（「多く」が大事）少しぼかしながら問題を顕在化させる。自分だけが正直に伝えたら「損をした」「傷ついた」マイナス経験だけは避ける

ことである。

### （7）第7回番組「助けてくれる大人はきっといる」に対する指導助言

#### ①大人ってすごく相談しているんだ

大学の教員になって驚いたことの一つは、相談に研究室を訪れる学生が多いということ。今回の番組を見て、気づいたことがある。それは、大人の多くは生きていく上で困ったとき、かなり他者に相談しているという事実、つまり、生きていく上で他者に相談することは当然のことなのだ、という人間論、人生論を筆者自身が小学生にしっかり教えてこなかったということであった。心拓いてSOSを自由に発信し応答できるクラスを目指してきたが、弁護士やカウンセラー、相談所のように相談自体が職業になっている仕事や人について、医師・看護師や牧師（教師はなおさら）のように職業上相談されることが当然の仕事や人についてしっかり教えてこなかったということ。教師や保護者がまずそのことを押さえることが、今回とても大切だと思う。

にもかかわらず、大学生や大人が相談をしているのはなぜか。それは、中学生後半から高校生時代を迎え、特に未知の世界に向かって自分の進路を決めなければならなく、体験している人の知恵を必要とするからであろう。そうした事態に直面すると多くの仲間も大人も相談して生きていることが見えてくるからだろう。それでも3万人の自殺者が生まれている現実に対しては、「もし一人でもいい、しっかり相談ができ受け止めてくれる人を持っていたなら、ここまで増えないだろう」という指摘があるように、大人にもまだまだ相談が足りないということになる。（以下、略）

最後に、重松清著『みんなのなやみ』（新潮文庫）を紹介しておきたい。

### （8）第8回番組「ケータイ”でいじめが起きるとき」に対する指導助言

#### ①低学年から始まる発信者隠し！

小学校中学年の今、というよりこれから否応なく入り込んでいくネット社会に対する対応力を問うている番組。中高生もかなり視聴しているので制作者はその年代をも強く意識しているのだ

が、ここでは主に小学校中学年を対象に、番組視聴後どのように子どもと広げ深めるかについて述べる。

メールで誰か特定個人を非難誹謗し続ける、しかもそれを多くの仲間に流し、同調や攻撃参加を働きかけるいじめの手法は、ケータイ出現以前からある。それは、ノートなどの用紙に悪口、中傷、非難誹謗など、発信者を明記しないままに書いた言葉によるいじめである。あるいは、けんか、トラブルの延長線上に位置づく抵抗や攻撃の一種の場合もある。その用紙は、たいてい机の中や下足箱の中、靴の中に入れてある。ときには、教科書やノート、机上などに書き込む場合もある。相手が大切にしている私物に書き込む後者の場合は、前者よりも悪質ないじめであろう。

小学生時代に起こるこうした事態の的確な指導、すなわち「発信者不明、顔を隠してことばによる暴力」「事実確認を一切しないで噂として広げ、相手を追い込んでいく暴力」という本質に迫る指導が、ケータイによるいじめを防ぐための前段階の指導として重要である。

#### ②視聴後学級で話し合いたいこと

1) 問題になる用紙を渡された本人の了解を得て公開し、学級の子どもたちと話し合う機会を作る。

2) 意見の多くは「こんな嫌なこと、卑怯なことをするのは最低だ。言いたいことがあれば、直接言うべきだ」との正論が多くなるがそれも肯定する。顔を見せながら直接言うことこそ大事、正体を隠して攻撃するのは卑怯だとしっかり確認するのはやはり大事。でもそれだけでは歯止めの力にはなかなかならない。

3) 苦しむ友の「物語」が見えてくること、そこから生まれる共感が最も大切である。その嫌なこと、卑怯なことをついやってしまった経験ややろうとしたが踏みとどまった経験、逆に嫌なこと・卑怯なことをされ悲しく苦しかった体験談などを話し合う。

4) 教師自身、家族、友人、教え子の体験を掘り起こしリアルに事実と感情を語り込む。

5) 筆者は多くの場合、匿名性で書いた子の行動（隠れて書くとき、書いた用紙を隠す）をぶつぶつ独り言をつぶやきながら演ずる。子どもたちは

笑いながらも「それってとっても醜い！」と言う。その声を受け強く言う。「この場にそれをやった人がいたら笑えないでしょう。笑っていたとしても無理に笑っているでしょう。後悔に苦しんでいるでしょう。それってやっぱりすごく醜く悲しいことです。ちっとも幸せな一日を過ごせないでしょう。」と。

6) やっぱり言いたいことがあれば、直接相手に発信・表明しよう。それをこれまでもやってきたからつながり合う仲間ができたという事実を全員で明らかにする。

7) その後、番組で紹介されたケイコの例を話し合う。メールと用紙に書くという方法の違いも明らかにできるといい。直接相手に言えないなら、個人の日記（ブログではなく）に書くか、空・山・海に向かってや部屋の中で思いっきり「〇〇のバカヤロー」って叫ぼうぜ！！と。

8) 番組で紹介されたニュースで確認したいこと、すなわち一貫した本質、「発信者不明、顔を隠してことばによる暴力」の連続は、恐ろしさ・醜さの無感覚・非人間性を強め、他者を死に追い詰めることを確認する。

9) さらに触れたいことは、番組で研究者が指摘している、中学生で半分以上、高校生でほとんどが所有しているケータイの使用は、99%が正しく使っていること、そのプラスの使い方の例を高橋が繰り返し語っていることを明らかにして、誇り得る先輩に見習おうと締めくくる。

#### ②教師の学習として

肝心なことは、いじめの防止を教えるのではなく、子どもこそいじめを乗り越える主体者であり、その主体を育てていくのだという思想を貫くこと。可能であれば、以下のことを学習してみる。中高校において、メール、ツイッター、チャット、ラインなどケータイ・スマートフォンの使用について独自の教育をする機会を持つ一方、生徒に端的に心の叫びを歌い上げる俳句・短歌・川柳に取り組む教育実践が豊かに展開されている。前者に関する書籍として、名古屋の高校生たちが、同世代のケータイ、スマートフォン事情、使い方やケータイ依存症などの影響を調べて書いた『中高生のためのケータイ・スマホハンドブック』（学事出版）が出版され、全国で評判になっている。

### (9) 第9回番組「これが僕らのノックアウトパンチだ」に対する指導助言

①学級に「いじめノックアウトパンチ探偵団」を作ろうぜ!

今回は、いじめをノックアウトするために効き目バッチリの「パンチ」を視聴者の手紙から探してみよう、という番組である。まず一場面の一例目は、先生に相談したら、話だけで自分の心が整理されスッキリしたということ、二例目は、家族に相談したら支えてくれたということ、三例目は、いじめていた本人に直接問いただしたら仲良くなれたということ。二場面は傍観者にはならないという思いを強く持った体験。三場面は3年1組の気づかないうちに誰かを傷つけていたことの掘り起こし。担任教師が最後に子どものすばらしい発言を受けて「すごくいい言葉を聞きました。ありがとう」が光っていた。それぞれの場面や最後に高橋が的確に受けとめ、「お互いを思い合うこと」とまとめていた。

これまでのように番組視聴後、すぐに「パンチ」を明らかにする話し合いを持ってもいいが、筆者は角度を変えた、番組制作者たちから学ぶ手法を提案をしたい。それは、番組に手紙を寄せた3人の経験者のような人(体験)を自分たちで探して聞き取りをしてみよう、つまり「いじめノックアウトパンチ探偵団」を学級に提案してみたら、という提起である。

②誰にインタビューするか、地域に生き、自分たちにかかわっている人を自覚する(略)

③子どもたちが本当に聞きたいことは何かを考える(略)

④豊かに表現し、多くの人に伝える機会をつくる  
種々の人にアタックする探偵団・取材班活動を終えたら、そこから分かったこと、みんなに伝えたいことをしっかり話し合い、壁新聞、印刷新聞、レポート、紙芝居などに工夫を凝らして表現する。それを学級の仲間に伝えるだけでなく、聞き取りに協力して下さった方々はもちろん参観日に保護者や全校生に伝えることが大事。誰にどのように伝えるかの話し合いや表現活動が、ノックアウトパンチを明らかにすることにとどまらないで、いじめを深く考える重要な機会になる。

⑤取材者こそが最も教えられ学ぶ

どうしてこんな探偵団・取材班活動が大切になるのか。

1) 活動を通して多くの大人との関わりは、「生きた良い勉強しているねえ」「あなたたちは絶対いじめをしない子になるねえ」などと声をかけ、誉め、認め、見守り、応援し支える人を、また相談できる人をつくることになる。

2) 私たちは今、大勢の人との豊かな関係性の中に生きている、生かされている、大切にされている、私は一人でないという実感を育む。

3) 多くの大人に問いかけ、応答するには、「人に働きかける勇気」が必要。挨拶をし、目的を告げ、質問すると言った手順を踏まえて人に向き合う体験は乏しい。いじめに遭ったとき、他者に相談する勇気、大自然に向かって叫ぶ勇気、逃げる勇気、なぜいじめの?と問う勇気はこうした体験の中で強まる。

4) いじめに関わる体験を大人はそれぞれに持ち、傷つけ、傷つけられながら、何とか乗り越えながら、今も苦闘しながら生きてきた、生きているんだという発見と共感を持つことができる。

5) いじめ探偵団は小集団活動であるため、相談、自己主張、トラブル、妥協、和解などを繰り返し、人とぶつかり合いながらつながりあう力を育む。子どもも教師も野性、社会性を十分育まない「良い子」では、いじめ問題に限らず困難な問題の解決能力や危機管理に対する対応能力が不十分。

6) 活動を地域に飛び出して大人と関わって展開するということは、周囲の関心と応援を高めることもあって、いじめ問題を真剣に考えざるを得なくなる。これこそがいじめの加害者、傍観者にならないパンチをつくる。

最後にすでに放映(2013年8月25日)されたが、NHKスペシャル「僕はなぜ止められなかったのか?～いじめ自殺・元同級生の告白～」をぜひ視聴して欲しい。多分再放送される。内容紹介はNHKのHPに以下のように書かれている。(略)

### (10) 第10回番組「最後に、絶対忘れないでほしいこと」

①苦しみ生きる姿を徹底想像

番組では、かつていじめられた経験をもった高

校生と母親が登場。その辛さは、当の本人が番組に登場して語っているので、視聴している誰にも伝わってきて苦しくさえなる。その場面を再生してもう一度視聴させて欲しい。特に3人の子を持つ母親の苦しみは、高校生の姿を見ただけで、動悸・息切れ・腹痛に襲われ、トイレに30分引きこもらざるを得ない症状に苦しんでいる。苦しむ母親、不安と心配そうに母を待つ子どもたち、その子どもに必死に何かを語っている声にならない母の声の全てを想像すること、さらにそのようになるまでにかつていじめた誰かのあの時と今の姿も想像させて欲しい。今も苦しむ被害者に比べ、今、加害者はおそらくそのことを忘れて日常をすごしていることだろう。そのことを踏まえて子どもの想像力だけでは不十分な点を補うように教師がじっくり想像したことを語りこむ必要がある。

#### ②あわせて読み聞かせたい絵本

その上で松谷みよ子作『わたしのいもうと』（偕成社）をぜひ読み聞かせたい。これは実話をもとに描かれた悲しい絵本である。いじめられ、学校に行けなくなり、引きこもり、家族にも心をひらくことができなくなり、食もとれなくなり、亡くなってしまふ。最後に、「わたしをいじめたひとたちは もう わたしを わすれて しまった でしょうね あそびたかったのに べんきょう したかったのに」という言葉だけを残して。「やりたかったことがいっぱいあったよね、どんなこと、あった？」と問い、今の自分たち、兄弟姉妹を思い浮かべればたくさん考えることができる。その全てを永遠に奪われた。ここでも大切なのは想像力である。

#### ③願い、訴えを再度だしてもらおう

筆者の学級で4月早々この絵本を読んで、いじめられた体験を表明し合った実践の紹介。(略)

#### ④不安・絶望感を持たせないこと

復讐を企てた新聞記事を含むこの番組に絵本をプラスし、いじめられた訴えを再度引き出すような取り組みはとても重要である。番組と絵本は、いじめは、受けた人をそれ以後も長く深く傷つけること、だからいじめをストップしようということを強烈に教えると同時に、他方では、過去、現在、将来いじめを受けた、受けている、受ける

かも知れない子に、あのようにならずと引きずって生きなければならないのかという不安感、緊張感、絶望感をも教えてしまう可能性がある。これまでの番組を生かして、だからいじめられた場合、ひどくならないうちに一人で苦しまず誰かに勇気をもって相談したらストップすることができ、一生心に深く残ることはないよ、ということも忘れないで！とあわせて指導すべきである。

#### まとめ

番組で取り上げた内容は、大津中二いじめ自殺やインターネットいじめ問題も含めて多岐にわたる。それに関わっての指導助言であるため、実際指導は録画、印刷しておき1年間を通して学級で生起する事態と照らし合わせ取捨選択して取り組む必要がある。番組と指導助言に共通して強調していることは、いじめられ、いじめた当事者の身体から発せられたリアルな言葉での語りとそれを引き出し、表現することを応援し、徹底して聴くことである。番組はあくまでその「呼び水」に過ぎず、視聴のみにとどまるようでは子どもに責任を負った教育実践とは言えない。

とりわけ、かつて酷くいじめた加害者の経験者を番組に登場させることができないというテレビ放映の制約上、種々の問題・困難を重く抱えながら深刻な他者暴力、非行等に走らざるを得ない子どもたちへの指導のあり方についての助言は弱い。しかし、小学校低中学年に限って言えば、一貫して述べてきた、安心して自分を出せる、語れる、それを受けとめ合う関係性（保護者も含めて）を確かに紡いでいけば、見通しは明るいと言える。

このNHKEテレの番組は高校生や保護者にも多く視聴され、「いじめノックアウト」の特集版が一般向けのNHKスペシャル番組として制作放映されたり、「いじめ、なにソレ？というほうへ～100万人の行動宣言で“空気”を変えよう～」というキャンペーンの取り組み、さらに「いじめを考えるSpecial出張授業」<sup>4</sup>にまで拡大している。筆者はイベント化する取り組みには賛成しかねるが、教師と子どもが求める出前授業の要請には応えることにした。「高水準の危険事態」を看過するわけにはいかないからである。

1. 佐貫 浩「民教連ニュース」2013・1、No.・213
2. <http://www.nhk.or.jp/tokkatsu/ijimezero/teacher/ne-rai.html>「番組のねらい」(2013・4・15)
3. いじめ問題に対する筆者の全体的な実践論は「一人ひとりの存在価値を認め、互いの尊厳を守る教育の追求」(『生活教育』特集“いじめとむきあうとは?” 2012年12月号)を参照
4. 2に同じ